

# 小学生の居場所の実態と学校適応感の関連

○嶋本岳文・井上弥  
(広島大学大学院教育学研究科)

## 問題と目的

文部科学省(2015)の調査によると、2014年度の不登校児童の割合は過去最大となった。学校環境に適応できなくなることで生じる不登校は、要因や背景が複雑である。取り巻く環境によってはどの児童生徒にも起こり得る(文部科学省, 2016)とされており、学校適応感を高める要因を探っていく必要があると考えられる。

その要因の1つとして、居場所の存在が考えられる。例えば、石本(2010)はクラスにいる時に「自己有用感」を感じることを、杉本(2006)は友だちのいる場所があることが、学校適応感に影響すると述べている。このように、効果的な居場所が異なるだけではなく、研究者により「居場所」の定義や居場所で抱く感情が異なっている。さらに、上記の研究では学校適応感を「主観的な適応感」のみ対象としており、適応感を高める要因までは検討されていない。

そこで本研究では、従来の研究を包括的に捉えて居場所を考え、学校適応感を高めることに効果的な居場所状況を探っていく。加えて、不登校の要因として最も割合の高い「不安」(文部科学省, 2015)が、学校適応感に与える影響も検討する。

## 方法

**調査対象者** 広島県内の小学5,6年生72名(男子33名, 女子37名, 不明2名)。

**調査内容** 居場所感1: 石本(2010), 大久保(2005)等を参考に「安心感」, 「充実感」, 「自己有用感」, 「被受容感」の4因子を想定し, (場所): 自分の部屋, 家, クラス, 学校(にいる時), (人): 一人, 家族, 友人(でいる時)の居場所感について尋ねた(計35項目, 4件法)。居場所感2: 居場所感1の7か所について, そこを居場所と感ずるかどうかが尋ねた(計7項目, 4件法)。特性不安: 曾我(1983)の児童用状態-特性不安尺度のうち, 特性不安の2因子各々において因子負荷量の高かった3項目を採用し, 回答を求めた(計6項目, 4件法)。学校適応感: 栗原・井上(2012)の学校環境適応感尺度(ASSESS)のうち, 6因子各々において因子負荷量の高かった4項目を採用し, 回答を求めた(計24項目, 5件法)。

## 結果

まず特性不安の6項目について因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行い, 固有値1.0以上, 因子負荷量.40以上を基準に, 1因子6項目を抽出した。次に居場所感1の28項目, 特性不安6項目の平均点の計29個を説明変数, ASSESSの各因子を目的変数とし, 回帰木というデータマイニング手法を用いて分析を行った。

「生活満足感」に最も影響する居場所及びそこで抱く感情は, 学校での安心感であった(Figure1)。「向社会的スキル」も同様の結果であった。また, 「教師サポート」, 「友人サポート」に最も影響する居場所及びそこで抱く感情は, それぞれ学校での自己有用感, 友人からの自己有用感であった。「非侵害的關係」, 「学習の適応」では, 居場所より特性不安の方が強く影響した。

以上の結果から, 学校適応感を高めるには, まず「生活満足感」に影響する学校での安心感を向上させるよう, 環境設定や人間関係づくり等を行うことが必要だと思われる。くわえて, 児童の適応の実態に応じて, 用意する居場所環境や支援が異なることが示唆された。

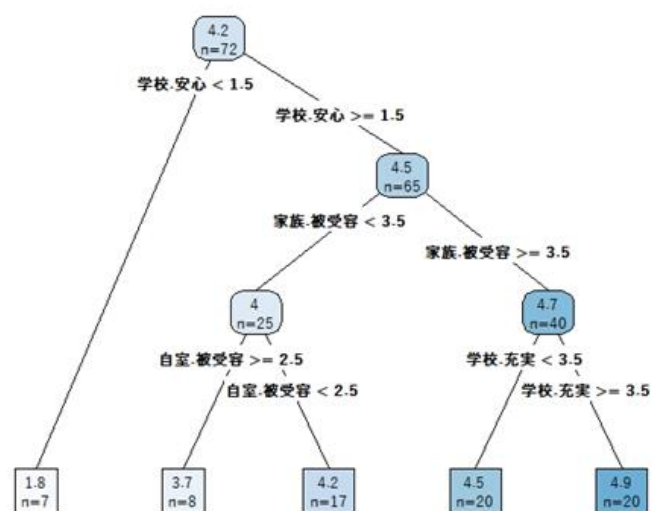


Figure1 生活満足感の回帰木